

## 4154 地球のかおり：「草原のたわむれ」（産経新聞）心模様

ワンマンショーならぬ、ワン鹿ショー。

ロッキー山脈、アメリカ側、イエローストーン国立公園へ。

カナダの帰り道だった。マクドナルド湖、かなり広大な平原になっている。

今回の旅のターゲットは、ロッキー山脈を、縦走することだった。

カナダ側から、イエローストーンまでの往復。（この時は、車で国境を越える事が出来た）

カナダ側のロッキー山脈は、何度か訪ねている。今回も、バンクーバーからの出発。

カナダの資料では、ロッキー山脈は、北へ行くほど、美しさを増し、

それとともに、険しくなるといふ。3.000m級の山塊が、ゴロゴロあると。

人のやらないことをやる。人が訪ねないところを訪ねる。何もないという道中が楽しみ。

久楽の感性の働きどころ。自分の目で見ることにしている。

自分の感性を信じ、現場で体感することを信条にしている。危険はついてまわる。

観光案内所やガイド、人それぞれ、見方や感じ方が違う。

カナダ、カルガリーから、ロッキー山脈沿いに、アメリカに越境。

そこは、モンタナ州。イエローストーン国立公園が、目印になり、目標になった。

イエローストーンの周辺には、宿もある。バッファローの群れや、景観を楽しんだ。

目的も果たした。そろそろカナダに戻ろうと、出発した。国境までは距離がある。

道中は、観光地ではないが、いつものように、道草をかさねた。

走りつづけたが、宿が見つからない。身体も疲れてきている。どんなところにいるのか、

標識も見当たらないので、わからない。

ただ、カナダ側、北へ進んでいるのだけは、確かである。

そして、眼前の平原に出くわした。黄色の花が美しい。見通しも聞く。危険も少ないと判断した。

この先、宿が見つかる保障もない。時間外に、国境を通過できるか、定かでない。

万一を考えて、車中泊を念頭に、準備はしている。車だから、有難い。

食料も、充分ある。広大な大平原。人も車も、見かけない。

幹線から離れている気配。仕方なく、車中泊を決め込んだ。

その翌朝、夜明け前に、目覚めた。

何しろ、自分探しというより、厳しい状況下に、身を置き、どのように、  
我が身が対応するか、そんな側面もある。  
旅のスタイルが、ひとり行脚であるのも、他に、気をとられないため、ひたすら、  
ある年数を、独りよがりの世界へ。この時、すでに、延べ、10万時間になってしまっていた。

話を元に戻して、黄色の花が、咲き乱れる、その地には、鹿より、私が、先にいた。  
そして、鹿の登場。周囲に、他の鹿は、目撃できない。私と一緒に、ひとり。いや、一頭だけ。  
どうして、この鹿は、ここにいるのだろう。どこからきて、どこに行くのだろう。  
何を考えているのだろう、と思いつぐらすひと時。暇といえば、暇。

ふと、この光景、舞台のよう。早速、鹿の演技が始まった。  
まさか、この時間、こんなところに、人間様がいるなど、思いもよらなかつただろう。  
人と出会うことが少なく、人間が恐ろしいという認識もないのだろう。  
最初は、我を忘れて、観ていた。観察していると、そのしぐさが、実に興味深い。  
私まで楽しくなってくる。のびのびと、楽しんでいるようだ。  
こんなに近くで、見られるとは、なんというラッキー。  
車外に出てみた。やはり、早朝は、肌寒い。  
しかし、空気が、美味しい。私自身が健康だから感じられる、最高のご馳走。  
健康体に産んでくれた、生母に感謝したい。

そして、どれだけ時間がたつただろう。そろそろ、私も出発したい。  
この光景だけに、時間を、これ以上使うには、もったいない。  
もっと素敵な出会いがあるかもしれない。鹿は、まだワン鹿ショーをやっている。  
ありがとう、と礼を言って出発した。  
しばらくして、振り返った。まだ、ワン鹿ショーの真っ最中。  
鹿も、よほど気持ちがいいのだろう。そのしぐさを見ていて、それがわかる。

そんな朝のひとつき。至福の時間だった。